

新たな知的空間の創出に向けて

くろだ たくや
黒田 拓也

(一般財団法人東京大学出版会常務理事)

1 はじめに

「新しい学術情報流通」の可能性を追求する契機となったシンポジウム¹⁾からすでに4年がたつ。思えば、出版社と大学図書館双方の意識の高まりのなかで、ひとつの具体的な取っ掛かりを示したのが、慶應義塾大学メディアセンターと行ったこの取り組みであった。

何事も積み重ねを無視してはならない。今次の約2年間にわたる「電子学術書利用実験プロジェクト」は、学術コミュニケーションの変化に直面していたアクターが、時間をかけてそれぞれの問題意識をぶつけ合い、主体的な意思をもって実現した、稀有なプロジェクトである。それだけに得られた知見や「実験チーム」に参加していただいた企業の皆様との連携・協働は何物にも代えがたい貴重な経験である。

ここではそうした経験を経たうえで見通した、新しい大学出版の方向性を軸に議論してみたい。

2 「コンテンツは Web である」

実験プロジェクト第1期を終えたあとの総括の場だったと記憶しているが、そこでこの実験プロジェクトの慶應義塾大学側の中心メンバーである島田貴史は発表のなかで「コンテンツは Web」であると発言された。このことは、その後の第2期、第3期の実験過程における学生からのシステムに対する要望内容やコンテンツの使い方をみても実証されたと言える。

つまり、予想されたことであるが、学生はレポートであれ、試験対策であれ、必要としている箇所を探し、必要な情報を自分なりに整理したうえで、いつでもどこでも使える時間に利用したい、というニーズがあり、さらに、自筆や友人のノート、過去の試験問題や先輩のレポート、時間割や講義要綱までがスキニングされてあるサークル内で共有されて「流通」するに至っては、そうしたプライベートな学習情報と同列に書籍や各種資料を Web 上で利用したいと考えるのは、ある種当然といえよう。

3 実験に対する問題意識の変化

実験開始前ないし開始直後までは、この実験においては、まずはデジタル化されたコンテンツを学生の方々が本当に利用するのか、利用するとしたらどのような感じで、という実に素朴な疑問を確認することを考えていた。

また、実験の計画を多くの出版社に説明した場では、OCRの精度問題で議論が紛糾し、いま思うと、出版社がいかにかその時点で見通しを持っていなかったかがわかる。

それだけに実験に主体的に参加した出版社は成長した。もちろん、いまでも考え方に様々な濃淡はあるだろうが、大学出版部の立場からの認識としては、書籍のデジタル化は、従来の出版の守備範囲をさらに拡張することであり、それに伴い「サービス」という概念をベースに、Web上で、新しい知的空間のありようを設計する取り組みであるとの考えを強く持つに至ったのである。

4 明確になる実験の意味

島田貴史は、『情報管理』2011年9月号掲載の論考のなかで、この実験の目的を以下のようにまとめている。

「本実験の目的は3つある。(1)電子化された学術書が学生や研究者に受け入れられるかを確認し、必要とされるならば、(2)導入に必要な利用モデルを検討し、(3)電子学術書を支える技術面の評価を行うものである。また、これらの目的を達成するために、(a)読者の声を集めて関係者にフィードバックする、(b)実験システムや利用モデルを大学図書館と参加出版社との対話で構築する、(c)実際に動くシステムを使って具体的な実験を行う、という3つの方法を取った。」

先に述べたような考え方に立てば、この実験から見えてくるものの輪郭がはっきりしてくる。引用部分の(3)は最小のコストでサービスを提供するためには、絶対に考慮しなければならない重要な要素であるし、(b)は、まさに持続可能なサービスを提供す

るための第一歩である。さらに(c)を通じて、インターフェイスも含めた、ユーザーによる機能のモニタリングまで行えたのだから、実に大きな成果である。

また、各種の利用ログの分析もあり、これまでの机上の議論を大きく凌駕する知見が蓄積されたのである。

5 「実験」から「実用」への道程

進むべき方向を判断する考え方も固まり、実験から各種の有益な知見をまずは獲得できたわけだが、依然として、ここから「実用」への道のり、つまりは、新たなビジネス・モデルの確立までは越えなければならぬ課題はいくつもある²⁾。

まずコンテンツの量である。どれくらいの規模であれば大学市場(教育・研究)は満足するのか。限りなく小さな規模である現在を考えれば、少しずつ増えていってもそれなりの反応があるだろうが、期待される規模に至るまでの時間軸をどのように考えるべきか。ニーズに合わせていくのか、それともいち早く大量にコンテンツを投入することによりニーズを掘り起こしていくのか。

当面は従来型の書籍流通モデルと新しい学術情報の流通が混在するかたちになるが、その割合の変化はどのようにしていくのか。そのときに重要な、大学の研究・教育の現場は、どれくらいのスピードでICTを十分に活用したシステムに変わっていくのか。

そもそもシステムの運営に関わる多様なアクターはそれぞれどのように収益を確保するのか。それぞれが期待する価格構造はどのようなものか。

思いついたままいくつか挙げてみただけだが、答えが明確に見えているものは、ほとんどない。

6 動き出した取り組みを支えてほしい

慶應義塾大学における「電子学術書利用実験プロジェクト」は、新たな知的空間づくりの先駆となったものだが、これと並行して、さまざまな大学でいくつものプロジェクトが進行している。代表的なものとして、千葉大学のアカデミック・リンクの試みが挙げられるし、規模の差はあれ、全国の大学のいたるところで先進的な取り組みが進行している。

筆者が所属しているような大学出版部では、そう

した動きにできるだけ敏感になり、次のビジネスにつながるような展開になりうるかどうか目を光らせている。

そうしたなか、ぜひ大学関係者の方々をお願いしたいのは、時代の趨勢がデジタル化であり、それが教育においても研究においても、グローバルな競争環境のなかで必要なものであるならば、それぞれの大学の個性の下に、システム環境の整備をぜひとも積極的に支えてもらいたい。

お金はないのでそちらでなんとかしてほしい、というのでは、出版社としてもとうてい持続可能なコンテンツの提供はできない(そもそも学術出版の経営は成り立たない)。教育現場における利用の拡がりなくして、デジタル・コンテンツ市場の拡大もないし、さまざまな機能を組み合わせたサービスの充実というのも困難であろう。

7 すべては「知的空間」の充実のために

少し愚痴めいてしまったが、われわれがここまで慶應義塾大学の電子学術書利用実験プロジェクトに積極的に関わってきたのは、とりもなおさず、デジタル化を契機に、日本の、とくに大学における知的環境の改善につながる可能性を見出しているからである。

昨今の「紙」の教科書の販売実態をみると、現在の大学において、どうやって学生の知的レベルが維持されているのか不安に思う。教科書や学術書を読むことだけが学問の入り口ではないが、論理的な叙述にふれ、さらにはそうした他者の考えをふまえて自分でも論理的に物事を考えてみる機会が減っていることは確かなのではないだろうか。

こうした大学において必要とされる最低限の力を涵養するためには、現状より一桁も二桁も多い量の文章を「読む」ことが大切であろう。書籍よりも、知的な素材にアクセスしやすくなるために、多種多様なデジタル・コンテンツが集積した新たなプラットフォームが充実し、そこにデジタルならではの複合的なサービス機能が組み合わさっていく必要があるのであれば、大学出版部としては、そのことに積極的にならない理由は1つもない。

8 おわりに

今回のプロジェクトでは、これまで一堂に会する

ことがなかった多彩なアクター（とくに出版社と大学図書館）が、1つの仕組みを動かすために集まり、まだ見ぬ未来について大いに議論できたことに意味があった。

このあと新たな共同実験が構想されているが、そこは「実験」というよりは、新たな知的空間創出のための具体的なサービスのあり方を吟味する場になるかもしれない。われわれの歩みはそこまで進んできたと考えたい。

注

- 1) 2008年3月12日に慶應義塾大学三田キャンパスで行われた、「大学出版会と大学図書館の連携による「新たな学術情報流通」の可能性を探る」と題されたシンポジウム。
- 2) 出版社としては著作権処理の問題は非常に大きいですが、この件は小磯勝人氏（慶應義塾大学出版会）が本誌別稿で述べているので、詳しくはそちらを参照のこと。